

第10号
児童数 328名
(男188名女140)



のぶっ子

みんなが主役・みんな学ぶ学校

あいことば: あいあい大作戦 スローガン: やさしく かしく たくましく

〒311-2442
潮来市小泉2090

Tel :0299-66-2076
Fax:0299-66-4692
E-mail:nobukata-el@itako.ed.jp
URL:https://www.itako-sch.ool.jp/nobukata-el/



プログラミング学習を行いました。5年生は算数の授業で、画面上に正多角形を描かせました。4年生は理科の授業で、電気自動車をプログラム通りにコース上を走らせました。

終業式をしました。2学期に頑張ったことや友達と仲良くしたこと、周りの人への感謝などの発表がありました。



始業式をしました。相手の気持ちを考えることや、6年生に安心してもらえるようにしたいなどの発表がありました。

書き初めを行いました。低学年は教室で、中学年以上は体育館で、素晴らしい作品を仕上げました。

4年生以上が学力診断テストを行いました。一生懸命勉強した成果が出るでしょうか。

～青山学院大学陸上部 長距離ブロックものがたり～

「今年の学連選抜*はどうしちゃったの？」
これは2008年の正月恒例・箱根駅伝で、いつも最下位争いをしてきた学連選抜が総合4位という快走を見せた際の私の感想です。この時の驚きと不思議な気持ちは、今でも鮮明に覚えています。そして、この快走の謎が解けたのは、それから8年後、青山学院大学陸上部部長・内山義英氏の講演を聴いた時のことでした。

今年2025年の箱根駅伝も、大会新記録で優勝した青山学院大学は、今や大学長距離界きっての名門。しかし、かつては長い低迷の時期がありました。きっかけは1976年の本大会。10区の選手がゴール手前150mで意識を失い、途中棄権。これ以降、青山学院は本戦出場を逸し続けます。そんな中、悲願の本戦出場と「途切れたたすき」をつなぐために、2004年から陸上部 長距離ブロックの強化が始まりました。

無名の監督、原晋氏の挑戦

監督は、「挫折を経験した人に」という当時の陸上部長の提案で、全く無名のサラリーマン・原晋氏が抜擢されます。とはいえ内実、「3年間の期限付き嘱託職員」。収入はサラリーマン時代の半分ほどだったそうです。

約束の3年目となる2006年10月の予選会では、青山学院は16位に沈み、チームは崩壊寸前。大学内では「強化をやめるべき」という声も上がりましたが、「もう少し様子を見よう」という意見がわずかに勝りました。

チーム改革と学連選抜での快進撃

2007年、強化体制の4年目。強化一期生が主将となり、「監督と一緒に最後までやりたい」という思いを胸に、寮生活からの改革を進め、チームは一丸となりました。しかし10月の予選会では10位となり、当時の予選会からの出場枠の9校には入れず、本戦出場を逃します。

ここで登場するのが「学連選抜」です。予選会次点校の監督が学連選抜の監督を務めるため、2008年は原監督がその役割を担いました。彼は数回の合宿を、練習よりもミーティングに重点を置き、学連選抜を「チーム」としてまとめました。その結果、学連選抜は歴代最高の総合4位という快走を成し遂げたのです。

奇跡の本戦出場

2008年10月の予選会では、青山学院は13位。12校の予選枠には入れず、夢はついえたかに見えました。しかし、ここで奇跡が起こります。前回大会で学連選抜が4位となったことで、シード校が1校減少。その結果、残り1枠に青山学院が滑り込んだのです。これが青山学院にとって1976年以来、33年ぶりの本戦出場となりました。

その後、青山学院は箱根駅伝に17年連続出場。クビ寸前だった原監督が、栄光への階段を登り始めた瞬間でした。

学連選抜* 2015年より、「学生連合」に名称変更、以降オープン参加となり、チーム・個人とも参考記録扱いとなる

参考：青山学院大学陸上部部長 内山義英 氏 講演「若者たちが自らの能力を引き出すとき」2016
同 大学陸上競技部 長距離ブロック監督 原晋 氏「青山学院大学駅伝チームの箱根駅伝強化の歴史」2017 早稲田大学大学院修士論文